

団報

会計報告

出費の多い中から団費をお出し下さいましてほんとうに感謝いたします。本月から会計の報告をさせて頂きます。

大正十年度

収入合計 四百拾貳円参拾五銭也

内訳

前年度繰越金 参拾壹円七拾一銭

十年度収入 参百八拾円六拾参銭

支出合計 五百拾四円六拾九銭也

差引不足金高 壹百貳円参拾四銭也

大正十一年度一月より四月末まで

収入合計 壹百六拾八円拾銭

支出合計 貳百五拾四円七拾七銭

差引不足金高 八拾六円六拾七銭

不足金高累計 壹百八拾九円重一銭

私たちは厳しい規約の前に立ちとうございませぬ。どこまでも自由に、そして真実に進みとうございませぬ。私は団費を一定して義務的に納めて戴くことをやめます。そして行けるところまで行きつめて見たいと思います。ほんの少数でもいい、ほんとうに心からの浄財で維持したいと思ひます。感謝しながらお出し下さるお金のみに私は涙と感謝を捧げます。

百九拾円の不足額、ああ、そこには人間のあらゆるきたなさがかくれています。立派なおうちがたつ、立派なお倉がたつ家の若様から三年越、一銭の報酬もないのもあります。本団創立以来一厘の出費もなく、金があるなら出すと言われたお鬚の紳士もございませぬ。親愛なる同胞諸兄弟様それらのきたなさはそれがひいて私たちのきたなさでございませぬ。じつとしてはいられませぬ。

財産を子孫に残すのもいいことです。可愛い子や孫に残してやりたいのは人情の自然でしょう。けれども財産の裏に何かしら（福田？）一緒に残さねば、またたく暇になくなります。先年山崎農学士は「人間の糞つまり病は医者が下剤でなおす。家の金つまり病は、放蕩息子が出て下ろすわ、下ろすわ、痛快に下ろす。これ天の配剤である。」と言われました。

私は、それでも涙の出るほどの感激をおぼえます。無い内からも五銭十銭毎月心掛けて、どうでもいい出費を始末して、生きたお金を出して下さる方のあるのを知っています。寮費以上に出して下さった方もございませぬ。せちからい世の中と人は言う。

けれどその中からも真実のはえぬきを見出して感激しています。御健在に、さよなら。

### 不言の言を聴く

#### 人間の行くべき道

宇宙最高の権威者でいます生命のみ親よ。み親はその徳において智慧において慈悲において絶対者でございます。それは如何なる言葉でも言い表すことの出来ない不可称、不可説、不可思議におわします。

私たち人類は長い間、人間にゆるされた浅い智慧、一分間後すら確かに証拠だてることの出来ない智慧、一分間後すら誓うことの出来ない智慧、物の表面だけ見てその本質を知ることの出来ない智慧、まだまだ言い方のないほどの間違いのあるあさましい曇りの来た智慧で、おお、その智慧で、み親の絶対を説こうとしました。何という僭越でしょう。何という冒瀆でしょうか。

又、ある者は、人間に恵まれた、せばめられた、末通らぬ心の清さを捧げて、み親の温かいみ心から感応を受けようとなりました。そして救われようとなりました。

ある者は「私はこの通り清い心で証を立てます。」と言って祈禱いたしました。

ある者は「私は清い心で善い事をいたします。その善をお取りおさめ下さって、永遠の歓びの園に入れて下さい。」と言って善を励もうといたしました。

ある者は山に入つて妻子から離れ、世間からのがれて智慧の眼を開いて、自分の運命をみ親のような永遠なものにしようといいたしました。

けれどもそのどれもが私の行くべき道ではなかったのです。

#### 三つの間違い

私たちは自分というものについてあまりによく知っています。私たちが私たちの内に聖なる願いを見出した時には、私たちは私たちの罪悪に泣き、苦しみに疲れ、死におびやかされ、どうかしななければならぬのにどうも出来なかつたのです。

清い心にもなれました。けれどもそれも二、三日で消えたのです。

清い証も立てたのです。けれどもすぐにそれも破れたのです。

善事もしてみたのです。けれども一つの善すらみ親の前に出せるものはなかったのです。一つのよいことをする間に数知れぬ悪を犯すのです。

冷たい哲理に聖なる自分を見出そうとしてもして見たのです。けれども「定水を凝すといえども、識浪しきりに動き、心月を覷ずといえども妄雲なお覆う、而るに一息追がざれば千載長く往く」のです。

もうどうすることも出来ない時、私たちは「自ら然らしむる」み親のお言葉を聞かされはじめたのです。

それについて私たちは、私の第一の間違いを発見させられたのです。

「お前は自分の力でそれが出来ると思うか？ それはお前には出来ないことなのだ。お前は無始以来のお前の迷いがお前を生んだのだということを知らないのだ。お前は人間という者の約気を忘れている。」との御言葉でした。

そうでした。懺悔はただ懺悔のままに消え、清い心は汚ない心の中に沈み、こうしよう、ああしようと願っても、すぐその次ぎの瞬間に変わってしまふ不定な自分の心でした。それを知らない大それた願いだつたのです。

私はまた、第二の間違いを知らねばなりません。私は至尊如来のことをみ親と言っています。私はみ親をみ親として仰いでいなかつたのです。至尊を冷やかに見ていました。私が清い心で願いましたら、私の願いを聞いてくださるみ親だと考えていたのです。私の智慧を私が開いたら仰がれるみ光だと思っていました。何という冷たいみ親の見方でしょう。人間の親子の愛すら、親の方から働きかけるのです。

私の知らないその内から先手かけて、私の如何にかかわらず、血と涙で、私を抱きしめ、「さめよ！ 覚れよ！ 聞けよ」と叫んで下さつたのです。大慈大悲のみ親であるからには、この単純な真理のわからぬはずはないのに、やっぱり私を育てあげて下さるまで、その単純な真理のわからぬ私だつたのです。

「私は清い心になります。お救い下さいませ。……私は正しい智慧をよびおこして私自身を救いたい。……私は善事をはげんで、功德をつんで聖なるお光を仰ぎたい……。」

何という継子根性でしたでしょう。何という私の大きな迷いでしょう。

私たち衆生は、み親と私とを別々に離して考えていました。私がおらなくてもみ親3ほいますし、み親はいますきなくても私はあると思っていました。これが根本からの間違った第三でした。

み親の「不言の言」は心の耳にひびきます。

「もしお前を、救うことが出来ねば親だという正覚はとらぬ」

しかるに、み親は十劫の昔に至尊になつていらせられる。私の親となつて下さつてあるのです。

私あるが故のみ親、私を救うことにおいて無量の功德莊嚴におはしますみ親なのでした。

(私は中論の観念可燃品第十を味あわせていただきました。空の理をおいて)

私たちは火と薪を分けて考えていました。火は薪(あるいは炭)を離れてもあると思っていました。火はただ薪によつてのみの火でした。薪は火によつてのみの薪でした。火と薪は同じものでもありません。といつて違つたものでもありません。異と、同じとの中間のものでもありません。

み親という火は、ただ、衆生という私あつての火なのでした。如来と私とは全く異つたものでもございませぬ。又、同じものでもありません。その中間のものでもありません。言語では言えないことなのです。

とにかく、私とみ親とは離して考えることは出来ないことなのでした。私を救つてくださつてのみにますみ親でした。結局私はどうすることもなかつたのです。このままがお光に燃えさせられるのでした。

仰いで「ああ」

「不氣の来」のみ親さま。私たちは、あまりにみ親を人間の眼で見っていました。十  
万億土に祭りこめたり、仏殿とか、祭壇の上におしあげたりして、偶像としてしか見  
ていなかったのです。

けれども私たちはみ親のみ名のあまりに尊いことを知りました。

「涅槃をば、滅度という、無為という、安樂という、常樂という、実相という、法身  
という、法性という、真如という、一如という、仏性という。仏性即ち如来なり。こ  
の如来、微塵世界にみちみちてまします。すなはち一切群生海の心にみちたまえるな  
り。草木国土ことごとくみな成仏すととけり。」

一切世界の衆生の心にみちみちたまう法性法身のみ親は「いろもなし、かたちもま  
しまさず、しかればこころもおよばず、ことばもたえたり」私たちが考えることの出  
来ないお姿でございます。

「一如より形をあらはして方便法身とまをす。そのおんすがたに、法蔵比丘とな  
りたまひて、不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり。」

誠にみ親は、色、形、香を超越したまう、私たちの範疇ではどうすることも出来な  
い絶対的絶対者におわします。けれど方便法身のお姿を表したまい、ついに「誓願の  
業因にむくいたまいて」報身如来のお姿、阿弥陀如来とおなり下さったのでありま  
す。一体にして無量の姿を表したまう報身のみ親様、不生にして私の内に生れたまう  
不生の生のみ親様、来らずして来りたまう不来のみ親様、私は全ての言葉をもつてし  
ても讚嘆しつくせませぬ。仰いであ、とあきれるばかりでございます。

恵まれた夜は更けてゆく

私は行きづまりのない金剛無碍の白道の上を歩かせて頂きます。

み親の、大悲のみ親の、たのませてお救い下さる先手の一方働きの全ての方便に  
よつて、宇宙微塵世界に輝きたまう智慧のみ光にあわせていただきました。

根本実在でおわすみ親に参徹することを得させて下さいました。

私の生命の奥に君臨します、み親の不言のみ言葉を聞かせて下さいました。

私はただ心からの願いに従つて真実に真実にと生きさせていただきました。

罪であろうが、死であろうが、私には問題ではなくして下さいました。

生死の園に居ながら、それがすぐ如来への生きかたとは、何という尊さでしょう。

私は、私自身の、あの三十二相八十種好の姿を、礼拝させて頂きます。

今の私に与えられた唯一の慰安である快い眠りに入らせて頂きます。

恵まれた夜は更けてゆきます。

合掌

(六月九日夜二時)

清く生きようとする願い

清くなろうとする願いを失ったほど哀れなことはない。否、むしろ私は悲痛すら感ずる。

若い同胞よ、どうぞ、固い固い生命の殻を作つてくれるな。中年を過ぎた人間たちが長い間の無反省な生き方のために、自然に悪を嫌う心が麻痺し、善を求める心のうすらいで、その日その日を習慣と因襲に引きづられて生きているのを見ると堪えがたい悲痛をおぼえる。

大きな罪悪を犯した者でも、たとえ社会的に見捨てられた者でも、皆清くなりたいという願いを捨ててはならぬ。清くなりたい願いを失わぬ以上、その前途は祝福されてある。

私たちは力一ぱい高く、力一ぱい清いところに心を遊ばせたい。

出来るだけ、一時間より二時間、一日より二日、出来ることなら常に、清い清いところに心を跳躍させたい。

もつと高く、もつと高く、もつと清く、聖なる天上に心を遊ばせたい。

私たちに何ほどの善の実行が出来ていないことにも、何ほどの実行されていないことにも、かわりない清い尊い想像に私自身を生かさねばなりません。想像力の及ぶかぎり、出来る出来ないにかかわらず、極楽そのままの清さの中に、私の心を遊歩させねばなりません。

靈の固くなつた者にはそれが出来ない。

心の内に開けて来る浄土、輝いて下さるお光は、私のこころした聖なる願いの深みゆくと共に、一層はつきりと拝せられるように思われる。

浄土は善悪からはなれてあるのではない。悪人正機のお救いということ、善悪とはなれて別なところにあるとすれば、それはもう救いではなくて悪魔の声だ。

「悪人ほど可愛い」ということは、悪をせよということではない。

「悪人ほど可愛い」ということが、悪の奨励であるならば、大悲のみ親のみ心ではなくて、悪にさそう悪魔の呪いである。

「私たちの善には毒が雜る」ということは、「だから、お前は悪をせよ」ということではない。私たちのすることは一切、善か悪かにわけられる。私たちはそれを恐れねばならぬ。善と悪に裁判されることを恐れないものに、どうしてお救いが有難からう。真宗の信者は、あまりにこの恐れから遠ざかっている。

悪を恐れる心なしに信心にこりかたまろうとする。そして信心の手渡しと称する末の末の問題を追つて、自分の心を説教者に合わせようとする。ここに彼等の墮落がある。

み親は決して、善悪をはなれて、私を救つて下さるのではない。善悪に裁かれか私、重い重い悪の罪のために泣かねばならぬ私、罪に服せねばならぬ私を、大悲の力によつて、とびこえさせて下さるのだ。

重ねて言う。救いは裁きから（即ち善悪から）はなれてあるのではない。善悪をとびこえさせて下さるのだ、私の罪を代つて受けて下さるのだ。私たちはどこまでも善を求めねばならぬ。どこまでも悪をおそれねばならぬ。

### 『歎異抄』に

「まことに如来のご恩ということをばさたなくして、われもひともしあしということをのみ申しあへり。聖人のおほせには、善悪のふたつ総じてもて存知せざるなり。そのゆゑは如来のおん心によしとおぼしめすほどに知りとほしたらばこそよきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどに知りとほしたらばこそあしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫火宅無常の世界はよろづのことみなもてそらごと、たはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはしますとこそおほせほ候ひしか……。」

自分のところに、我欲を中心にして他人のすることを見て、あれがいい、これが悪い、と裁きあつています。そのみにくい様を「よしあしということのみ申しあへり」とお言いになつておられるでしょう。私たちの智慧で「あの人がいい、この人が悪い」ということは、正しくわかるものではない。だからこそ、聖人のおはせに「善悪のふたつ総じてもて存知せざるなり」とあるのでしょうか。

自分の心にふりかえつて、自分の心のきたない汚れていることには泣いたこともない者が、他人ばかりを見てよいとかわるいとか言つておられるさまは、私ですら泣ける材料です。

私たちは、朝に昼に夕に、我が心を省みねばなりません。そうして何時までも若々しい靈に生きねばなりません。

### 動かぬ事実

動かぬ事実はたくさんある。さしあたり心に浮ぶ三大事実を書いて見る。

- 一、生れたことのある者は、一人も残らず病になる。老人になる。死ぬる。
- 二、たとえ、天と地が変り、東に太陽が沈んで西に朝日が昇る時が来ても、私が仏になるという事実にまちがいはない。
- 三、地上で人間にゆるされた最大の権威は誠心である。愛である。燃える生命である。

この三大事実間違ひはない。

人は一切病にかかる、若き者は必ず年をとる、人は一人残らず死ぬる。第一の信条はあまりに平凡である。平凡であつてしかも誰も動かすことの出来ぬ真理である。大聖釈迦如来はこの平凡な真理に動かされて永劫の真理を体得した。平凡を平凡として棄てるところに凡人の悲しさがある。

釈迦が虚言を言わない以上、キリストや、親鸞や法然や龍樹や善導が虚言を言わない以上、否、私が人間である以上、私が仏である、仏になるという事実には動きはない。私が仏であるという事が事実なら、あなたが仏であることにも動きはない。

地上最大の構成は誠である。人間の心が誠に遠ざかっていることと、誠が最大の權威であることは別である。私たちは私たちの心が誠に遠ざかることを悲しむ。けれども、真実に、より真実に、真実を追うことを忘れてはならぬ。

「信心よろこぶそのひとを 如来とひとしときたまふ

大信心は仏性なり 仏性すなわち如来なり。」

友と別れても悲しみません。家族が死んでも泣くでしょう。私たちには毎日、心の浮かぬことも、よろこばぬこともあるでしょう。けれども、もつともつと深い意味に於いて、私たちは霊のどん底に、尽十方無碍光を有ちたまふ如来の真実をよろこぶ、大安心、大歡喜の上に立っています。

私のもつ大信心は仏性である。仏性とは即ち如来である。

如来は私のたましいの奥殿に君臨して私の内に生きたまう。

如来の光明は、

無量光（はかることが出来ぬ過去をてらし、現実をてらし、未来をてらす、量的限りがない）

無辺光（宇宙に遍満してはてがない）

無碍光（何物も仏の光をさまたげ得ぬ）

無射光（一切これに比すべき光がない）

炎王光（一切の無明煩惱罪惡をやきつくす）

清浄光（一切は清められる。お光の前に醜穢がない）

歡喜光（仏を信ずるものに歡喜があたえられる）

智慧光（一切の愚痴は破られて真実の智慧は輝く）

不斷光（仏の光は一秒のたえまもない、未来永劫に輝く）

難思光（私の計ひや恩ひを超越する、考え得ない光である）

無称光（何という名のつけようもない光）

超日月光（その強さ太陽のおよぶところでない）

である。その思慮に絶し、言説に絶せる仏の光明が我が生命に入りたまひ以上、たとえ、わが心に浮ぶ、煩惱、無明の黒雲が出て来ようとも、どうして、夜の暗さにかえらうぞ。

煩惱の雲破れてはさし出る光の尊さ、まばゆさ。

愚痴の黒雲をも突き破つて出て下さる、炎王光の光の強さ。

怒りの醜いきたない雲を自ら浄化せしめらる、清浄光の美しさ。

ともすれば、つまらぬ小事に泣く涙の内に輝きたまふ歡喜の光。

ああ、歡喜の光、よろこびの光。我こそは地上、たった一人の最大歡喜の持ち主よ。

私たちは救われた。一切をまかせて救われた。私の生命は永遠である。

私たちは、「私は悪人だ」その言葉にあまえてはならぬ。お光は私の内に君臨したまう。私をはなれて仏はない。

私たちは仏を生かしきらねばならぬ。私たちが、事にぶつつかる時、人間味をなめる時、御光は私の内に白熱して下さる。私たちの生命の内にはやむにやまれぬ叫びが生れる。深い谷底にいながら九天の空をのぞむ。そこに私たちの道徳がある。肉を食う、妻をもつ、家をもつ、財産をもつ、しかもそのままが浄化されてゆく。

しばらく世俗にかえつて生ける道徳を説く。

曰く歡喜に入れ。

「おのれ、貴様が……」と手をふりあげて妻君の横顔を打たんとする時、又は一つ打った時、一秒二秒、自分にかえれ。手の下には、汝にかわつて受けたまう仏あり。悔いて大地に伏して自己の内にはいます仏の声を聞け、

「我、そのまま汝を救う。」

怒る者は、歡喜に遠ざかる。五回を三回、三回を一回、心をつくして怒りに遠ざかれ。

み光を、強く深く受けて、仏の心になりきる時、宇宙には、腹をたつべき一物もないはず、自分が見て気に入らぬとか、嫌だとか思うのは、ことごとく我が妄念よりおこる迷いなのだ。

如何なる理由、如何なる事情があろうとも怒りは絶対に悪である。

私たちの生命から歡喜の光をかくすものは怒りの悪魔である。

財産の貯蓄競争が始まる。財産を貯めるもいいことです。田を買うのもいいことです。けれどこの競争の激しい部落に足を入れて見る。お隣とお隣の何という冷たさだろう。山の境が喧嘩の種。知らぬ間に木が切りとられる。隣の不幸が自分の幸、朝早くから夕おそくまで働くわ働くわ、それもいい。働くのもいい。出来た財産はいつたいどれほど浄められている。

一代、二代、その前の先祖が、貧乏人の膏血をしぼり、他人の田の草を盗み、他人の山の木を切つて、ためて積んだ財産なら、利が利で太れば太るだけおそろしい悪魔のひそむ呪われた御殿。おお財産に囚にされた人間の一生。生きて歡喜もなければ、死してあとに残る福德もない。苦しむために生れたか。子孫に残す呪いを何と見る。出来ることなら豊かに暮せ。けれど、伏魔殿の黄金山で、おびおびして暮すよりも、正しくて貧しきものの安心を学べ。

歡喜に生きんとする者に言う。

曰く、与えよ。

生きて残る、食ふに余る収入の幾分が社会のために使われたか、いらぬ着物、タンスの中で十年も出されない着物を、縫いかえて貧しき人に与えよ。美しい花を咲かせて隣に贈れ。野菜のはつをを近所に配れ。一寸やすませてという人にお茶を一杯い差し上げよ。貰い物は隣のおばあ様にわけよ。かくして積る財産を浄化せよ。他人をよろこばせて我も喜べ。



一つ仕事がある。集った五人は、皆がおうちやくに出来ておった。おうちやくに出来た人間たちはすぐ考える。一つの仕事を五で割って五分の一をすることが一番かしこいおうちやくの仕方である。そしてそこに彼等の平等があり、正義がある。

同胞よ、この論法でゆけば、この五人に歓喜の生まれる時は永遠にないぞ。

心に十字架をおう者とは、尊き血と汗を人類に捧げる者、仏（神）のために生きる者のことだ。

四人の怠ける者に、尊き汗を贈れ。

ただ生きてゆくため以外に、尊き汗をどうにか使え。

彼の国に至る永遠の旅路、めぐまれた道づれの重荷を半分負わせてもらえ。

私にも重荷があるというだろう。私の霊の実感は不思議な答えをこれに与える。

「重い荷の上に、他人の荷を半分受けたら、それだけ、私のは軽くなる。」

心の荷、心の荷を半分助けよ。

心の荷を、身体から汗を出して助けてゆく。そこには生の歓喜が生れて来る。汗を他人のために使え。

でもそれでは自分の損になるというならば、あなたの求めるものは信仰ではなくて、経済である。歓喜ではなくて、計算である。

他人の悪いところばかり目につく者、他人の短所ばかり見える者、そしてそれを、誰にでも、何時も、くさしたい者は悪魔につかれた者である。よく歓喜より遠ざかる。

つとめて他人の長所を見よ。よく腹と立てるところをほつておいて、淡泊なところをほめよ。失敬な奴だと見ないで、純なところを見出せよ。

誰にでもいいところがある。悪い人と言われる者にも、その奥には優しいところがある。人間である以上何かの役に立つ。

くさすよりもほめよ。悪く言うよりも善く言え。人をかげでくさすことをやめよ。あなたの内に悪魔の全盛を極めている時だ。見よ、他人をそねんで悪く言う女のあの毒々しさを。よろこびの血気なんかちつともない。私が見てさえ鬼に見える。

くさすよりほめよ。（今頃の私は痛切に感ずる。）口先でなら何時でも出来る。心を偽ることなく真に人をほめるには、私自身の心の奥を清めねばならぬ。

怒る心の始末をつけよ。くさすよりほめよ。物に心を添えて人に与えよ。善き汗を他人のために流せ。かくする者はよく歓喜に生きる。とても出来ぬと言えば問題はない。

衷心の願いを妨げる全ての悪魔と戦わねばならぬ。組織と戦わねばならぬ。たった一つの実行。それがこの上なく尊い。